

私の人生を変えた敗戦

神奈川県 山根 耕志

一 五十七年ぶりの里帰り

平成十四(二〇〇二)年四月十七日から十九日の間、旅順中学校の同期生二人に誘われて、「郷愁の旅! 大連・旅順の三日間」のツアーに家内と共に参加した。引き揚げてから一度も訪ねたことが無かった私にとっては、実に五十七年ぶりの里帰りともいべき旅で、何となく新鮮な気持ちになったものだった。

現在、経済開発地区に指定されている大連の人口は、二百七十四万人といわれていて、その繁栄ぶりが窺われた。よく整備された道路と、市街のあちこちに建てられた新高層ビル、全く昔日の面影は無く、シンガポールと比較されるくらい清潔な市街地と共に、強い印象の残る近代都市だっ

た。また、旅順は当時の旧市街に古くからあった高層アパート群がすべて新しく近代的な建物に変わって、私たちがいた当時三万人足らずだった人口も、約七倍の二十数万人に膨れあがっていた。一方、母校旅順中学校のあった旧軍港近くは、当時は新市街地といわれていて、広々とした道路が縦横に走っていてゆったりとした街並みであつたが、そこはほとんど変わっていなかった。しかし、呼び名だけは旧市街と呼ばれているように、やはり時代の移り変わりをしみじみと感じたものだった。

ツアーは総勢十人だったが、最初の夜の夜の大連では、北九州市にあるホテルと連携しているホテル・ラマダダイレン(大連九州華美達酒店)に宿泊したが、その総支配人は日本人で、ホテルの室内装飾をはじめ備えてある化粧品や室内履まで、すべて日本の一流ホテル並みだった。拓大出身という現地ガイドさんによると、日本企業との合弁会社は千社を超えていて、長期滞在の日本人

は約二万五千人もいて、日本料理店も多く、カラオケバーもあちこちにあるとのことだ。

かつての大戦当時、大連市の大広場国民学校に通っていた私は、学校の所在地である大広場周辺が非常に懐しく尋ねて歩いたが、現在は中山広場といわれて金融街に変身していた。当時のVIP用の超高級ホテルで有名だった大和ホテルや、旧満鉄社は旧ドイツ領事館とともに歴史的建造物として永久保存の対象になっていた。大和ホテルには、高級喫茶店や和洋中の料理店があつて、観光客専用の大連賓館へと衣替えをしていた。

私は、大連第三中学校から旅順中学校に転校したが、転校するまで住んでいた静ヶ浦付近の寒村地帯であった老虎灘は観光地と化していて、四十数キロメートルに及ぶ海岸道路は見事なハイウェイとなっていた。当時でも十三カ所あつた海水浴場の一つでは、まだ肌寒い初春だというのに、泳いでいる若者の姿も見受けられた。走っている車は、ドイツ製の車が多かったが、日本車は値段が

高く、とてもではなく金持ちしか買えないとのことだ。台湾とか北京などで多かった自転車や単車は、思ったより少なかった。その理由は、バスや電車、そして安いタクシーなどの交通手段が充実しているからだそうだ。公園や広場では、多くの市民が太極拳や柔軟体操などをしているのが印象深かった。しかし、ガイドの説明によると、大連の近代化は上海のそれよりも約五年遅れているそうだが、反面、物価は三分の一、市民の生活レベルもそれに合わせて三分の一と説明していたが、ちょっと見た感じでは街中は活気にあふれていた。テレビの普及率も急速に伸びていて、独身のガイドもテレビを四台も持っていて、全部で四十七チャンネルを見ているそうだ。しかし、第一チャンネルはNHKの海外放送テレビで、トップチャンネルと聞いていささか溜飲を下げたことだった。

昭和十八（一九四三）年四月に、父のハルビン転勤に伴って旅順中学校に転校したが、旅中は全

寮制だったので私も寄宿舎に入った。旅順は広く知られているように、日露戦争で乃木大将の率いる第三軍が苦戦をし、多くの将兵が戦死した聖地であり、旅順港には日本の海軍基地があり軍都といわれていたが、反面、旅順中学校・旅順高等学校・旅順工科大学・旅順師範学校・旅順高等学校等があつて、学園都市としても名高かつた。現在でも旅順港は中国海軍の根拠地になつていて、一般人は立ち入ることができず残念だったが、中国が日本人向けの三大観光地と指定した、東鶏冠山北堡壘、乃木大将とステッセル中将の会見した水師営会見所跡、そして旅順戦の最大激戦地である二〇三高地（別名爾靈山）は、立派に整備され観光者も多かった。特に北堡壘には日露戦争陳列館が建てられていて、中国人の見学者も少なくなかった。昔、唱歌で歌われた「水師営」の中の文句にあるナツメの木は、現在三代目だそうだ。二〇三高地の銅鉄製の表忠塔は今も健在で、旅中時代に毎年十二月に学校行事として行われた、全校

マラソン大会での目標地点であつたので特に懐しく、しばらくそこに佇んで当時を思い出していた。

二 曾祖父の渡鮮

外地居住者は敗戦の結果、例外なく人生が変わつてしまつた。特に満州における開拓団の私たちは想像を絶する悲惨な道を歩まざるを得なくなつたことは周知のとおりである。その中にあつて、特に婦女子のそれは、筆舌に絶する過酷なことであつた。

幸いに私たち一家は、都会地であるハルビンに生活の根拠を持ち、四十歳前後の働き盛りの両親と、十歳代半ばの男三人の兄弟だったので、苦難の中でも何とか歯を食いしばって乗り越えて引き揚げる事ができたことは、運が良かったと言ひようがない。しかし、将来は電気関係か機械関係の技術者を目指していた私は、その希望を放棄し生きていくための日常生活を優先せざるを得ず、結果は後年になつても目的を達成することが

できなかった。経済記者として後半生を送らざるを得なかった、ということはやはり敗戦による犠牲者の一人であることには間違いないことである。無論、引揚者ばかりが犠牲者ではなく、日本人全部がああ戦争で敗れたという結果から、人生を狂わせてしまったことと思う。

山根家も、日本が日清・日露の戦いに勝利を収めたことから運命が大きく変わっていった。私たちの曾祖父、山根仙吉は山口県の萩に居を構えて、中国地方はもとより全国的にも名を知られた大親分であったとのことだった。日露戦争直後の明治三十八（一九〇五）年十一月、時の政府の重臣伊藤博文公が、朝鮮初代の韓国統監として京城（現ソウル）に赴任した際、同じ長州出身として、昵懇じつこんであった仙吉に朝鮮統治について協力を要請された。義侠心に厚い仙吉は、一族郎党を引き連れて釜山に移住した。表向きは興業師として劇場を経営し、サーカスや芝居の座元となっていたが、本当の役割は裏の世界への睨みを利かせる仕

事であったと思われる。そんな大親分であったが、仙吉は酒は一滴も飲めず、お茶と和菓子的大好物とする好々爺であった、と仙吉の孫娘である母、法子は当時を思い出して話していた。

伊藤公はハルビン駅頭で暗殺されたが、山根家はそのまま朝鮮に根をおろした。大正時代末までは、日本からの手紙のあて名は、「朝鮮・山根」だけで届いていたという。母、法子は釜山生まれで、平壤高等女学校で学び、卒業後は東京の藤村学園に進学し、音楽と体操を学び、釜山高等女学校に奉職した。教師として赴任した当時の母は満十九歳で、最上級の生徒との年齢差は二歳だったので、父兄からは生徒と間違われることがしばしばだった。母にとっては、この数年間が自分の人生で一番の花の時代だった。

三 私の生い立ち

私は昭和四年四月六日に、父、勇、母、法子の長男として朝鮮慶尚北道大邱府（現在の大邱市）にあった大邱劇場の家で生まれた。父、勇は、九

州の久留米市の小学校長の次男だったが、九人兄弟だったので祖父の初太郎が父の人柄に惚れて、ぜひにということでも一人娘の法子と養子結婚した。

大邱は、昔からリンゴの産地として、朝鮮はもとより日本内地でもよく知られていたが、最近ではサッカーW杯の準決勝の試合地であり、さらには平成十五年二月の地下鉄内放火事件としても有名な名である。

父の転職により奉天（瀋陽）に移った私は、高千穂小学校に入学したが、その後も父の転勤によって転々と学校を動いたので、小学校時代には友人関係には恵まれなかった。昭和十七年三月に大連の大広場国民学校を卒業し、同じ市内にある大連第三中学校に入学したが、一学年の末に父がハルビンに転勤したので、大連を離れることとなった。当時、ハルビンには適当な男子中学校がなかったたので、旅順中学校に転校することとなった。

旅順中学校は満州国最古の中学校で、伝統のある学校だった。将来、私が目標としている旅順工大も市内にあったし、両親のすすめもあった。旅中には寄宿舎が完備されていて、教育環境は非常に良かった。翌年の昭和十九年四月には、両親と一緒にハルビンに行った弟の美宏も旅中を受験し合格したので、同じ寄宿舎に入ることとなった。

旅中に転校しても、戦争は一段と苛烈を極めていたので、まともな授業を受けたのは二年生の一年間ぐらいで、三年生になった途端に学徒勤労動員となり、私は大連市郊外の甘井子カンヰシにあった進和鉄工所に動員されて、中国人の工員と一緒にあって、軍馬の蹄鉄用の螺子釘を造った。若さの故かすぐに作業にも慣れて、一端の熟練工になっていた。

戦局はいよいよ深刻化してきて、五年制の中等学校も、修業年限が一年短縮されて四年卒業となり、上級生の五年生と四年生が同時に卒業することになり、一ぺんに最上級生となったが、その間

は四年生からことごとくに鉄拳制裁などを受けていた。いわれの無い暴力には納得できずに、随分と反抗したものであった。それ故に私は、下級生を一度も殴ることはなかった。

四 忘れ得ぬ洋頭灣^{ヤントウワン}

私は、敗戦の日の昭和二十年八月十五日を、旅順から約二十キロメートルほど西に行った洋頭灣の岬の突端にあった対空監視所で迎えた。この監視所には、私たち四年生九人が配置されて、三班に分けられて三時間ずつ交代で昼夜二十四時間勤務で空と海を監視していた。四月から終戦の日まで、わずか四カ月半の短い期間だったが、戦争中であるという感じもなく平穩で、牧歌的な生活をしてきた。周囲は中国人ばかりだったが、どうという騒ぎもなく、食べ物もウリ、ナスビなどの新鮮な野菜も豊富で、寄宿舎でのまずい食事にうんざりしていた私には、まことに天国と地獄の差ほどの感じだった。

休憩時間になると将棋指しに夢中になり、リー

グ戦で毎日二十局近く対戦していた。私と樋口君が常に一番手を争っていたが、樋口君の方が少し強かったように思う。現在の私はもっぱら囲碁専門だが、当時は一番の指し盛りではなかったかと思っている。

この監視所勤務の間の最大の事件は、我が小型貨物船が米国の潜水艦によって撃沈されたことである。「敵潜水艦！ 浮上する」という見張りからの報告に、みんながその方向を見ると、米潜水艦をねらって砲撃準備をしている。すぐに本部に報告すると、駐在の巡查と海軍の軍人がオートバイで駆け付けてきた。米潜水艦は魚雷を使い切ってしまったのか、それとも魚雷を使うほどの船ではないと見たのか、悠々と浮上して艦砲射撃を加えて、貨物船を沈めると再び潜ってしまった。そのうちに我が方の水上機が飛んできたが、間に合わなかった。大連の監視所では、早期に敵潜を発見して撃沈に成功したという話を聞いた。それにしても、我が海軍の誇りとする旅順軍港の近くま

で敵の潜水艦が出没し、浮上して悠々と艦砲射撃をするなど、敗戦も近いだろうと感じたものだった。

監視所勤務中は、ほとんど毎日のように洋頭湾の海岸で泳いでいたが、ある日のこと六人のうち私だけが遅れをとっていたので、早く追いつこうと懸命になって湾内を泳いでいたが、どうしたところかますます離れてしまった。そのうちに足に痙攣けいれんを起こしてしまい、「我が生涯もこれまでか！」と、覚悟を決めていた。海が割り合いに穏やかだったので、すぐに冷静さを取り戻して、海中に潜って足をもみほぐして、しばらく上を向いたまま海面に浮かんでいて、ゆっくりと海岸に向かった。あとでみんなと話をしたときに、湾内が引き潮であったので、外洋に海水が流れ出したところに遭ったのではないかということだった。

八月十五日午後一時ごろに、監督の駐在巡查が九人全員を集めて「たった今、天皇陛下自らマイクの前に立たれて、終戦のお言葉があった。日本

は戦争に負けたのだ。すぐにソ連軍が進攻してくるだろうから、君たちはこれにどう対応していけばいいと思うか？」と、興奮気味に話をした。

あの敵潜の我が物顔の行動を見ている私たちは、「やっぱりそうか？」と、つとめて冷静に事態を受けとめていた。それでも「ソ連軍の捕虜になるよりは最後の一人になるまで戦う！」とみんなは答えたが、鈍亀というあだ名のある上村君は、「いまさら、じたばたしても始まらないだろう。ここは一つ敵さんの言うとおりにして、じつと辛抱して捲土重来を期すべきではないか、再び銃をとる日がきたら、そのときにはおれは真っ先に志願する」と言った。一同もなるほどそのとおりだと考え直した。駐在さんも感心していた。

五 大連での出来事

戦争が終わった以上は、監視所での仕事は必要が無く、一刻も早く旅順に戻らねばならないと判断したが、旅順まで輸送してくれる車の手配ができずに、監視所で無意味な四、五日を過ごしてい

た。その間、駐在さんは実によく私たちの面倒をみてくれた。鼻下に髭を蓄えた、かっぶくの良い人間的にも立派な人だったが、羊頭灣で別れてからの消息は分からない。無事に日本に引き揚げられたことのみを願っている。

車の手配ができて、やっと旅順に戻り寄宿舎にたどり着いたが、驚いたことに寄宿舎の窓という窓は全部打ち壊されて、人の住める状態ではなかった。寄宿舎生の大部分は八月十五日に自宅に帰っていて、私たちが戻ったときには、鉄道が不通で帰ることのできなくなった数人のみで、みんな肩を寄せ合って舎監室で起居していた。その中には心配していた私の弟もいて、ここで再び兄弟の対面ができた。九月になり新市街の住人全員が、旧市街へ退去を命ぜられるまで、その舎監室で起居していた。

ある日、私たちを訪ねて三十歳前後の日本人が来た。目的は、寄宿舎の庭に面していた海軍の倉庫にある煙草を取りに来たのだった。もちろん倉

庫はソ連軍に接収されていたので、監視の目を盗んで取って来るのだが、私たち寄宿舎生も話にうまく乗せられて、泥棒の一端を担ぐことになってしまった。何をすることも無く退屈な日々を送っていたので、何か刺激を求めていたことは事実で、スリル満点でもあったので、すぐにその話に乗ったのだった。夜中に監視のソ連兵の背中を見ながら、梯子を倉庫の窓に掛けてそこから侵入し、手当たり次第にいろいろな煙草を持ち出した。舎前にあった防空壕が半分ぐらい埋まるほど取って来た。見付かれば、銃で撃たれることは分かっていたが、不思議に怖いとも思わずに精を出して盗んでいた。私が煙草の味を覚えたのも、このときからだった。

翌朝、例の男の姿が見えなくなった。「さてな？ おかしい！」と防空壕に行ってみると、案の定、防空壕の中は何も無く藻抜けの殻だった。私たちは見事にだまされて利用されたわけだ。もともとの発想はスリルを楽しもうということから

だったので、腹が立つこともなかった。

寄宿舎は荒れ放題となり、荒廃した山寺のごときものになり、時折、ソ連兵による臨検のようなものがあつたが、あまりの荒れ方にびっくりしてすぐに帰ってしまう状態だつた。そんな寄宿舎でも、一つだけ良いことがあつた。それは炊事場にはまだ多少の米や豆などの食料や、甘味品などが残っていて、食べることにあまり不自由はなかつたことである。しかしこの良いことも長続きはせずに、旧市街に強制的に移された。

私たちは、「うどん」というあだ名の新婚ほやほやの先生の家に世話になることになつた。ここでの記憶はただ一つ、それは食べた天ぷらで食中毒になり、下痢が止まらずに先輩の医者に世話になつたことだ。

十月になると、旅順の日本人は、全員退去を命ぜられて大連に移された。私も弟と共に大連に行き、保証人であつた北島家に身を寄せることになつた。

その大連でのある日、弟と市電に乗つたが、何とすぐ目の前に立っている男が、あの煙草泥棒の男だつた。思わず私が「おじさん！　しばらくだつたね」と声をかけたら、その男はびっくり仰天といった驚きようだつた。泥棒呼ばわりをされるのではないかと思つたのだろうか、すぐに顔色が真っ青になり、だんまりを決め込んでしまつた。次の停留所に着くやいなや、一目散に降りて走り去ってしまった。あのときの光景は、大連での忘れ得ない思い出である。

六 ハルビンへ奇跡の帰郷

身を寄せていた北島家は、クリスチャンで敗戦となつても人道博愛主義を貫いていて、両親を亡くした子供なども引き取っていて大家族であつた。私たち兄弟も、我が子のごとくに暖かく迎え入れてもらったが、ソ連軍の占領下で毎日の暮らしはだんだんと厳しくなつていった。一方私の気持ちにもいつになったら両親に会えるのか、日本に引き揚げるができるのか、果たしてそれはい

つなのか、などと考えると不安な気持ちでこうじってきた。そんな気持ちで毎日を過ごしていたとき、十一月の初めと思うが、ハルビンの両親からの手紙を持って北島家を訪ねて来た学生がいた。この学生は、戦中に日本内地からハルビンに遊びに来ていて、たまたま両親と知り合ったのと、大連に行くならばと手紙を託されて北島家に来たのだった。今になって考えてみるとあの混乱の最中に、しかも見ず知らずの土地にいて、よくぞ大連までたどり着いたものと、あの学生の強運と行動には頭の下がる思いである。そのうえにもう一つ幸運だったのは、北島家の親類に大連駅の助役をしていた人がいたことである。終戦直後からとだえていたハルビン行きの列車が復活して、その助役が専務車掌として乗り込むということで、この機会を失すると再びハルビンに行くことは難しいのではないかと、思い切って乗車することにした。北島家には、今までお世話になったお礼を述べて車中の人となった。その日は、忘れも

しない昭和二十年十一月二十九日午前八時であった。

車内は中国人ばかりで、弟と二人で小さくなって座っていたが、奉天を過ぎるころにその専務車掌がわざわざ私たちの席まで来て、「私のところにいらっしゃい」と、声を掛けてもらいほっとしたものだ。列車は途中で何度も長時間の停車を繰り返しながら、やっとハルビン駅に着したが、大連を出発して一昼夜以上も経った十一月三十一日の夜明け前だった。寒さで凍えるなか、駅の構内で夜の明けるのを待って、手紙に書いてあった地図を頼りに我が家を探し訪ねた。

朝早くの訪問者に、「だれかしら？」と、いぶかりながら母が玄関に出て来たので、私たち二人は大声を出して、「ただいま！」と叫んだ。慌ただしく玄関の戸を開けた母は、私たちを見て抱きしめながら泣き出した。気丈夫な母で、それまでに母の泣き顔を見たことが無く、このときが最初で最後ではなかったかと思う。当時としては、わ

らをもつかむ思いで大連に行くという学生に託した手紙が、私たちに届いて無事に帰って来るとは、思ってもいなかったことだろうから、その喜びもより大きかったことと思う。幸運に恵まれたにせよ、生き別れを覚悟していた母は、「奇跡だ！」と思つたに違いない。

その日、ハルビンまで私たちを送り届けてくれた、あの専務車掌が突然に我が家を訪ねて来た。事情を聞けば、駅で列車運行の打合せをしている

最中に、列車が勝手に発車してしまったとのことだった。大連に戻る見通しがつくまで我が家に滞在することになったが、そのころはそれくらい鉄道の運行は乱れてしまった。

七 信義厚き中国人社員

私たち兄弟がハルビンの家に戻ったころは、市街地の治安も少しづつ回復していた。両親の話によると、我が家は終戦直後に立ち退きを命ぜられたそうだ。家を明け渡すときには、中国人社員が総出で馬車を数台調達してきて、必要な家財道具

を転居先まで運んでくれたとのこと。中国人を酷使していた日本人が、戦後にはその報復を受けて、いろいろとひどい目に遭い、なかには殺された人も少なくなかったと聞いているが、我が家に限ってはそんなことはなかった。父の会社では、日本人だろうと中国人だろうと、国籍、人種には関係なく、すべて対等に処遇していたので、中国人社員は非常に恩義を感じていたそうだ。

終戦直後からの二、三カ月間は、ハルビン市内は混乱の坩堝るつぼと化していて、日本人狩りと称して中年以下の男性はソ連兵や、その手先となっていた中国人によって無差別に連れ去られて、シベリアなどでの強制労働に使われたが、父など日本人男性社員は、中国人社員によって中国服を着せられて、かくまってくれたばかりか、米、麦、肉、卵、野菜などの食べ物まで調達して来てくれた。そのおかげで、私たち一家も食べることに困ることがなかった。満州の奥地から引き揚げてきた、主として開拓団の方々には申しわけないよう

なことであった。

当時の中国人社会では、日本人に対する好意的行動者は、裏切者として一般大衆から指弾を受けていたから、もしこのことが知れたら断罪されることは間違いないことなので、彼らも命懸けで助けてくれたのだった。中国人社員の信義の厚いことには、感動させられたことだった。

後日、そのことを回想した父は、「私の行為は当たり前のことだったのに」と言っていたが、日頃の行いがいかに大事であるかを事実で示したものであった。

中国人社員の信義ある計らいによって、無事に転居した家もようやく慣れたと思う間もなく、その年の末ごろには再び立ち退きを要求された。今度は、十二畳ぐらいの一部屋の間借りであった。ここでは、柔道六段と称する屈強な若者が、用心棒として同居することになった。

彼からは、麻雀や囲碁などの手ほどきを受けながら、しばらく一緒に暮らしていた。

八 住民調べで危機一髪

終戦の翌年、昭和二十一年になると在留日本人に対する中国政府の圧迫は一段と厳しくなり、私たち一家五人も、再度引っ越しをせざるを得なくなり、ついに六畳一間に押し込められる羽目となった。心強かった用心棒とも別れた。

そのころになると、ソ連軍は全部撤退し、その後に入って来た軍律の乱れている国府軍の姿も見掛けなくなった。次いで進駐して来たのは八路軍で、ハルビン市内の治安に当たったが、ソ連軍や国府軍と比べると格段に規律が厳格だった。私たちの日常生活もやっと落ち着きを取り戻したし、ハルビン市内も少しずつ活気がでてきた。

転居した翌日のこと、私たち一家がいる狭い部屋に、私とあまり年の違わない八路軍の少年兵が入って来て、割り合いにはっきりとした日本語で、「ピストルを持っていれば、出さない！」と言った。私は、てっきり日本語を理解している兵士だと思って、「私たちは昨日ここに引っ越し

てきたばかりだ！」と強い口調で言って、前に住んでいた家の方向を指さしたところ、その少年兵はすぐに飛び出して行った。ほっとしているところに、しばらくして再び戻って来た。今度は腰から自分のピストルを取り出し、安全弁を外しながら、中国語で何やらまくし立てた。私の言ったことが理解できなかったようで、怒っている様子だった。私は「これで私の人生もここで終わるのか？」と、一応の覚悟を決めて目をつぶった。

しばらくそのままでしたが、少年兵の反応がないので目を薄くあけると、中国語の話せる日本人を捜しに行ったのか、その場にはいなかった。そのうちに中年の日本人を連れて戻ってきて話し始めた。その人は私にも、「どうしたのか？」と尋ねたので、今までの事情を話した。その人が少年兵に話したところ了解したらしく、うなずいたまま出て行った。あとで知ったことだが、私たち家族の入った六畳間には以前警察官一家が住んでいたため、その一家と間違っってピストルの微発に來

たらしかった。弟は、「あのときはお袋も、兄貴も真っ青になっていた。親父と僕は比較的冷静だった」と、笑って言っていた。このときばかりは、さすがに気丈夫な母もおろおろするばかりだったようだ。いろいろな思い出を持ったまま、この部屋が引き揚げるまでの生活の根拠地となった。

隣の六畳間には、年配の夫婦が住んでいたが、夫人は料理屋を経営していたようで、ご主人は釣が好らしく、顔を合わすとすぐに夫人から「竿は何本でもあげるから、主人の用心棒として一緒に釣に行ってもらえませんか？」と頼まれた。寒さの残る四月だったが、天気が悪くない限り近くの沼に行つて鮒釣をする毎日となった。釣の腕もだんだんに上達して、引き揚げるころには三本の竿をあやつりながら、半日で軽く一貫目ぐらいを釣り上げていた。釣った鮒は中国人の仲買人に買い取ってもらい、家計の足しにしていた。

九 暇に残る中天の月

当時、ハルビンは八路軍の勢力下にあったが、奉天から南は国府軍の統治下で、国共内戦の最中だったが、日本人を早く帰国させるということで、両軍の停戦協定が成立し、昭和二十一年の九月からは、一回に約一千人ずつの引揚集団が編成されて、南下が始まった。私の一家は、四十歳前後の両親と、十歳代の男兄弟だったので、各人が持って行く荷物をリュックサックに詰めて背負った。

やっと順番が来てハルビン駅から乗車したが、列車は無蓋貨車だった。これには乳飲み子を抱えた母親が一番苦勞していた。「戦に敗れた国民の惨めさ」を、嫌というほど思い知らされたことだった。

引揚げ行でもっとも印象に残ったことは、八路軍の勢力下にあった新京（長春）と国府軍の支配下の奉天とのちょうど中間地点の川渚で夜営したときのことである。無防備の我々は、暴徒、匪賊

に襲われても抵抗する手段がないが、それでもということで、少年グループに不寝番の役目を命ぜられた。女、子供を中心にして円陣をつくり、その周囲を男性が囲むという形で野宿をしたが、夜半に中天にかかる満月が、皎々として照らしていた光景に、過ぎしことを思い考えていると、徹夜での警戒にも関わらず全く眠気を催さなかった。その夜のことは、月を見ると今でも忘れられないことである。

十 引揚げ開始

引揚船の出航する葫蘆島コロトコの収容所は、厩舎を改造した粗末なところだったが、水捌けを良くするために、急造の床が屋内の通路側に傾斜して造られていたので、寝ている間に体が自然に少しずつ、ずり落ちてきて、ついには通路に落ちてしまし、寝ぼけまなこでまた上に登って寝るといふ珍現象を起こしたことだった。

私たちの乗った引揚船は、米国の大型上陸用舟艇でLSTと称していたが、千人単位で乗船し

た。食事はまったくのお粗末で、米粒は全然入っていないかった。家族は引揚げ出発時に携行したビスケットやチーズで飢えをしのいでいた。あとで知ったことだが、他の引揚船では、米飯の支給があったということだったので、この船の乗組員が米を横流しをしたに違いないという、もっぱらの噂であった。

玄界灘はさすがに波が高く荒れていて、船は上下、左右に木の葉のごとく揺れるので、大多数の人は食事などはできなかった。

引揚船は佐世保に向かった。生まれてはじめて日本内地の景色を見て、緑濃い山野に驚き、禿山の多い全体が黄褐色をしていた満州や朝鮮と思えば、**「国破れて、山河あり」**の言葉を実感した。

十一 飢餓線上の生活

山根家一族は、明治の末期から朝鮮に移住して、**いて内地にはこれという有力な親類縁者がい**なかったの、父の実家である久留米の高橋家を

頼って行ったが、ここも久留米の大空襲で焼け出されていて、以前は倉庫だったところに、何家族かが一緒に生活することとなった。

一日と食糧事情が悪くなり、大世帯の台所はだんだんと苦しさを増してきて、早く家を出るようにと催促されるようになった。戦時中は、母の実家が豊かだったので、高橋家の求めに応じて随分と援助をしたそうだが、あまりにも冷たい仕打ちに母の怒りはすさまじく、母が亡くなるまで、以後高橋家との付き合いはなかった。平成十三年の九月に祖父母の五十年忌が、高橋家の菩提寺であったときに、私は山根家を代表して初めて出席した。

神戸高商時代の友人を頼って、父は私一人を伴って上京し、現在の江東区東陽町にあった材木屋に親子で就職することができた。当初は住み込みだったが、やがて近くの小学校の焼け跡に建てられた、引揚者用住宅に住むことができて、母や弟たちも呼び寄せ、やっと貧しいながら一家水入

らずの生活ができるようになった。このころが私の人生にとって最も苦勞の多い、精神的にも肉体的にも苦しい時代であった。

近くの農家に、母と二人で買い出しによく行ったが、米とかサツマイモなどは衣料品などの物品とでなければ交換してくれず、何度悔し涙に暮れたことか知れない。水っほいカボチャや、芽の出たバレイショなどは良い方で、サツマイモの茎を喜んで求めてきて食べたものだった。食料を得るために必死になって頑張る母の姿を見て、いざというときの女性の芯の強さに驚き、女性に対する考えを改めさせられたものだった。現在のこの飽食時代、食べ物を粗末にする人々を見るにつけて、いざれ天罰を受けるときがくることだろうと言わざるを得ない。この気持ちには私だけでなくあの敗戦後の数年間を実際に体験した人の、共通の思いであろう。

十二 自立生活に向かって

昭和二十三年を迎えたころには、我が家も極端

な飢餓状態からは徐々に脱するようになってきたし、住居の方も運よく青山に新築された都営住宅に移ることができ、そこで両親が亡くなるまで生活していた。

そのころ私は、母の親類の天野さんの紹介で共同通信社の勤労学生（勤労学生とは、昼間は社員として働き、夜間に学校に通うか、またはその反対の行動をする学生社員の制度）に採用されて、午後四時から働く夜間勤労学生となった。そのおかげで、四月から新制の都立高校に編入し、上級校への進学を目指して勉強を始めた。当時、共同通信社では勤労学生は大学卒業後には優先的に採用する制度があったので、高校卒業後は家から近い青山学院大学の商学科に進学し、卒業間近の昭和二十八年の春に、共同通信社経済部に正式採用となり、兜町にあった日本証券取引所の記者クラブ勤務を命ぜられ、経済記者の第一歩を踏み出した。

その後、いろいろな経済上の事件に遭遇しながら

ら、経済記者として精進した。昭和三十一年十二月には結婚して大阪支社勤務となり、新築の社宅に入れてもらった。そのころには日本経済は、朝鮮戦争後の不況時代をようやく克服して、高度経済成長長期に入り、経済界は活気にあふれていた。

その後も経済記者としていろいろな体験をしたが、現在を無事に迎えたが、残念ながら私夫婦には子宝が授からなかったので、平成五年にケア付きの高齢者住宅に入った。

終戦の前後のあの苦難に満ちた生活から比べれば、それこそ月とスッポン以上の違いのある毎日の生活である。満州の開拓団の方々の苦勞からみれば、私たちの体験はとてはなく勞苦のうちには入らないであろうが、それでも敗戦国民の一人としての悲哀は、嫌というほど味わされたものだ。

あれから半世紀余りを経た、いまだに許し難い思いは満州におけるソ連軍の乱暴、狼藉、傍若無人な行為であり、強制労働である。多くの人が

理由も無く犠牲になったことは、いつの世になっても忘れてはならないことである。

ともあれ振り返ってみると、引揚者の方々が本当に大変だったのは、日本に引き揚げてきてからの生活ではなかったかと思う。あの飢餓地獄を経験しただけに、今、大不況で騒ぐなどということはない、とんでもないことである。金や、物の面よりも精神面で大不況になっているのではないかと思うのみである。

運命に翻弄された私の人生

福島県 高坂 芳夫

私は、当時福島県東白河郡の宮本村といわれていた山間僻地の貧乏農家の長男として、大正十一(一九二二)年の九月にこの世に生を受けた。父は芳之助といい、母はフミ子といった。

この村は、田畑は少なく周囲は山ばかりで、大